

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

第47号

2021年3月31日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町 6-18

TEL (0980) 87-6257

目 次

1985年（昭和60） 船浦中学校の炭窯完成を祝して乾杯	1
竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ	2
はじめに	2
1 病魔の神々	3
2 歴史にみる感染症の流行	4
3 年中行事にみる悪疫退散の願い	8
4 結びにかえて	12
〈島々の踊り・狂言 No.8〉 殿様節	13
船浮に関する資料	16
白サギに向かうまなざし（西前津松市）	21
竹富町史編集事業の動向（2020年度）	22
第41回 竹富町史編集委員会	23
受贈図書一覧	27
竹富町史刊行物一覧	30
編集後記	31

表紙の解説

1985年（昭和60年）船浦中学校の炭窯完成を祝して乾杯

全国でも独自で木炭制作を行っている学校は珍しい。

船浦中学校の炭焼き窯の制作は、1985年（昭和60）に遡る。当時、同校の造林地にふんだんに生育されていた松の木などが、土地改良事業によって伐採されることから、その有効活用を図るために考えられたアイディアであった。

制作は、島で長年木炭を焼いてきた渡真利弘さん指導の下、PTA、生徒が総出で作業にあたった。写真は、窯を覆う屋根が葺きあがり完成を祝う保護者、学校職員、卒業生らである。現在はトタン葺きとなっているが、制作された当初は茅葺きであった。

西表島では、本土復帰前の昭和30年代から40年くらいまで、数少ない貴重な現金収入として、盛んに炭焼きが行われていた。当時、西表で炭焼きに使われた木材は、櫻の木、松の木、モクマオウ、椎の木、マチクなどであった。櫻の木・松の木の炭が高く売れ、1袋(6 kg)20セントで仲買人が買い、仲買人は石垣、宮古で1袋25セントで売っていた。炭焼きを始めた最初の頃は、醤油や味噌、うどん、そうめんと物々交換していたという。現在、西表島では生業としての炭焼きは残っていない。

船浦中学校では、現在でも恒例行事「炭焼き体験学習」として継続され、1袋（4kg）1000円で地域や一般の方々に販売される。また、「船中チャレンジビジネス」として、生徒たちがそれぞれの会社を立ち上げ、木炭を器にしたフラワーポットや消臭剤などの新たな商品開発を行なうなど、地域学習、キャリア教育の生きた教材として活用されている。収益は図書購入費や生徒会活動費、部活動の派遣費の一部に充てられている。



(提供：八重山毎日新聞社)

◆表紙写真◆

◎撮影・提供：金城盛正氏

◆参考資料◆

- ◎永田欣也「隨想炭焼き」、大仲康文「船浦中の思い出」、『炭窯』船浦中学校60周年記念誌
- ◎「昔懐かしい炭焼き小屋を再現」（『八重山毎日新聞』1985年7月21日付）
- ◎『沃野』船浦中学校五十周年記念誌、2010年発行
- ◎「船浦中学校 炭を器にフラワーポット試作「船中チャレンジビジネス」」（『八重山毎日新聞』2020年8月22日付）

竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ

はじめに —2020年のコロナ—

2019年末、原因不明の肺炎が、新型コロナウイルスが原因の感染症であると判明した。年が明けると感染は瞬く間に世界中に広がり流行した。そして、世界保健機構(WHO)は「パンデミック」(世界的大流行)を宣言。日本においても、感染症の拡大は緊急事態宣言(2020年4月6日)などにより、社会・経済活動や医療体制など、大きな影響をもたらすことになった。海外との往来はおろか、近所へ出かけることさえひかえてしまうような状況は、まったく想像できかったことである。

現在、国や地方自治体による蔓延防止の対策が行われているが、国内感染者が急増し始めた今年度3月ころをふり返ってみると、八重山地域には大勢の観光客が訪れていた。竹富町では限られた診療体制ということもあり、感染者が発生したとき、充実した医療の提供ができないことや、これに伴う搬送体制などの課題が浮き上がり、島々は緊張感に包まれた。

竹富町は4月3日に支援対策検討会を開催し、同月8日に「自粛宣言」。同月13日に石垣島で初めての新型コロナウイルスの感染者が確認され、八重山地域は新たな局面を迎えた。5月に入って石垣島への飛行機は減便されたものの、その運航が続くかぎり八重山への旅人を完全にシャットアウトするのは難しい状況にあった。逆に竹富町の島々は船便しか交通手段がないことから、外部からの人の移動を各島の港での水際対策に適した環境にあったともいえる。

そこで竹富町は、ゴールデンウィークの間、島々へ渡る高速船の全便を運休とするが、住民

のためだけの臨時船を確保して運航することにした。臨時船の乗船には、竹富町在住者が所持する「町民離島割引カード」を提示するか、また竹富町内で働いていたり、介護などでどうしても島に渡る必要がある場合、竹富町発行の「乗船許可証」を提示すると船便を活用することができる。石垣ー竹富間、石垣ー小浜間、石垣ー黒島間では一日二往復、石垣ー波照間間は一日一往復運航された。

その他にも、竹富町は石垣島のお店と連携し、「町民お買い物支援サービス事業」をスタートさせた。事前に対象となるお店に電話かFAXで連絡することにより、注文の商品を船積みしてもらい、その品を各島の港で受取るシステムである。その後、お店の銀行口座に代金を振り込むという流れが確立された。



(提供：八重山毎日新聞社)

その他、1人10万円の特別定額給付金の申請受付について、竹富町が県内でもっとも早く始めたことも特筆できようか。また、「アベノマスク」より大きめの「ニシオーマスク」も、高齢者を対象に配布されて好評だったことも、歴史の一コマとして記しておこう。

八重山地域は竹富町、石垣市、医師会が連携をとり合い、早い対応に第1波を4人の感染者だけで乗り越えることができた。その後、緊急

事態宣言は解除された。それは経済活動を前提とした生活が再開されたものだが、いまだ感染者数は増減を繰り返し、事態の終息を予想することができない（2021年3月現在）。

人類はこれまでに幾度か世界的な流行病を経験してきたが、それは竹富町においてもいえることである。マラリアについては、八重山の歴史において戦争マラリアの惨劇もあり、看過できないものであるが、また稿を改めてとりあげたい。ここでは「病魔の神々」「歴史にみる感染症の流行」「年中行事にみる悪疫退散の願い」を立項し、竹富町の先人が感染症とどう向き合い、何を講じてきたのかを振り返ることにする。

1 病魔の神々

『八重山島年來記』は、前近代の諸出来事が編年体で記された古文献だが、感染症に関する記事をさかのぼると、1602年に「八重山島疱瘡はやり人民余多相果」（八重山に疱瘡〈天然痘〉がはやり、人が数多く死亡した）とある。ここから強い感染力を持つ天然痘が八重山でも猛威を振るっていた史実がうかがえる。

沖縄で「疱瘡」（天然痘）は「清瘡（チュラカサ）」（「美しい瘡蓋（かさぶた）、できもの」の意）と呼び慣わしているが、竹富島では「太陽の瘡」の意で「ティランガサ」と呼称した（『竹富方言辞典』参照）。近世の琉歌集には、天然痘を「疱瘡神」として迎えいれる歌が数多く残っている。その「清瘡」は疱瘡神の船によって海を渡ってもたらすもの信じられていた。そのため疱瘡神の機嫌を損なわないよう、手厚く歓待する習俗「疱瘡神迎え」を行ったのだという（『沖縄大百科事典』参照）。天然痘だけでなく、感染症をはじめとする疫病が海を渡ってやってくると考えるのも無理もない。八重山地域では、風邪の神が島に上陸することによって風邪

が流行するというとらえ方が認められる。

竹富島で風邪のことを方言で「ハナッキ」という。これは沖縄古語「はなひき」（鼻引き）に通じる言葉であるが（『竹富方言辞典』参照）、『鳩間方言辞典』には「パナシキ フシウカルン」の項目がみられる。ここでは「風邪をひく」と訳されているが、本義（直訳）は「風邪が取り付く」としている。つまり、風邪（パナシキ）の神が人に取り付いて病気を起こさせるというのである。ちなみに『鳩間方言辞典』には、風邪は「ミーシキパナシキ」でも立項されており、「目付き・鼻付き」を本義とし、「風邪の神が目や鼻に取り付いて人間を病気にすると信じられている」と解説している。例文には「フユヌシチ ペールカー ミーシキパナシキヌ バヤールンダ ピルバ ヌキティ ヤラビヌ ヌビナ パカソーッタ」（冬の季節に入ると風邪（目付き鼻付き）が流行るので大蒜）を針糸で貫いて子供の首に穿かれた）とある。

ところで、『八重山島年來記』は1705年に編纂された古文献だが、西表島祖納村の「離御嶽」について、当時すでに「由来不相知」（由来は分からぬ）と記されている。しかし、離御嶽は「悪疫払いのウガンともよばれ、島人の健康を祈願するお宮といわれている」、「港の口を守るウガンである」（『西表島の伝説』『八重山のお嶽』）との口碑が伝えられている。

感染症の島への侵入経路が海、とりわけ港を考えるのは自明であろう。科学的・医学的な対策を講じることのできなかった時代においては、水際対策をしっかりと行なって、海からの疫病の流入を防ぎ、あとは祈るしかなかつたことだろう。

沖縄では一般に、海の彼方にある他界をニライ・カナイと称し、そこを幸福の源泉ととらえ

た世界観がある。八重山地域には神々がニライ・カナイから幸をもたらす内容の祭祀が数多くみられるが、離御嶽の「わたり神通ひ神」という神名にもこのような世界観が反映しているのかもしれない。

また一方で、ニライ・カナイは悪しきもの、災禍をもたらす側面も認められている。負の側面として、病気やウイルスも海、港から入ってくるということからも考えられる。島々に伝わる民話のなかには、海の向こうからやってきた病魔の神が語られている。竹富島では畠にさす魔除けのフキ（ススキをサン結びにしたもの）の由来として伝わっている。そこにはハナッキ（病魔）の神は歓迎されないものの、村人と親しく言葉を交わし、村人から港の出入口を教えてもらったお礼に、彼の畠の作物を特別に稔らせて島を去っていったという憎み切れない性格が描かれている（崎山毅『蠶蠅の斧』、上勢頭亨『竹富島誌』（民話・民俗篇）参照）。次に紹介する小浜島の「風邪の神のお返し」は、登野貞氏の語りによるもの。

「エイサー、エイサー」てい、すぐ舟は揚
いたーると、うぬん、なーらん行き、手
伝いはい舟は揚いるんほうきと、揚いしてい
はうんけーや、うぬんやめ一人間やあらなー
してい、竜宮ぬ神なりしてい、「あー、あり
がとう。うわー、一緒に舟揚いふいーるき、
うわんげすかはー、なすたあーめー。竜宮か
らたぬまり、村んげ伝染病ぬ種子は持ち来、
ま時きわー、うわーさっそく村んげ行き、うわー
どーぬ家とう、親戚の家とめー、注連縄はり
よー」ていはんつたと、なすたーさっそく
村中来、どーぬ家、親戚の家ん注連縄はれー
るんきーと、すぐ翌日から伝染病持ち来、むー
る村中や蒔き、注連縄はれーる家たんがみ

しゃり、ハナサキやみしゃーたり。どうはん
だ願いゆはーすたてい。

『南島昔話叢書9 竹富島・小浜島の昔話』

内容の理解を助けるために標準語訳から引用すると、「[エイサー、エイサー]と、必死に舟を（陸に）揚げようとしていたので、この人も、自分も（そこへ）行って、手伝いをして舟を揚げようとしたと。（陸）揚げしてそうしてみると、この人はもう人間ではなく、竜宮の神様になっていて、「ああ、ありがとう。お前さんは、いっしょに舟を揚げてくれたので、（お礼に）お前さんに、教えよう。（私は）竜宮から頼まれて、村に伝染病の種子を持って来て、蒔くことになっているが、お前さんはさっそく村に帰って、自分の家と、親戚の家とに、注連縄を張りなさい」とこう話されたので、この人はさっそく村に帰り、自分の家、親戚の家に注連縄を張ったところ、（その神様は）さっそく翌日から伝染病を持って来て、すべて村中にはらまいて、注連縄を張ってある家だけは無事で、風邪をひかなかった（そうな）。それで健康願いをするようになったって」。

このように竹富島、小浜島の民話から、島人が病魔の神々と交渉し、うまくつきあっている様子をうかがい知ることができる。

2 歴史にみる感染症の流行

(1)明治時代のコレラ

一「島庁通達綴」（波照間村事務所）を中心に一
1879年（明治12）、日本全国でコレラが猛威を振るっていたころ、沖縄は廃藩置県の混乱に揺れるなか、大勢のコレラ患者が発生した。沖縄の近代はコレラ対策から始まったといつても過言ではない。この流行は八重山地方にも及

び、地元では「卯年プーキ」（「卯年の風氣（疫病）」の意）と呼んで記憶している（『沖縄大百科事典』参照）。

1902年（同35）、宮古島にコレラ（虎列刺病）が発生したという通達（8月29日付）が、八重山島府から波照間村事務所に届いた（『竹富町史 第10巻 資料編 近代5』「島府通達綴」No.32記事）。コレラは激しい下痢と嘔吐を繰り返し脱水症状にいたる感染症で、重篤な場合は死にいたることがある。

宮古島ニ虎列刺病患者八名、疑似症患者貳名発生シ其内五名死亡シ尚ホ蔓延ノ兆アル旨只今検疫委員長ヨリ当警察署長へ電報有之候処、当島ト該島トハ、船舶交通ノ便モ有之候事故、万一二モ侵入スル様ナ事有之候テハ、実ニ容易ナラサル次第二付、該島ヨリ来ル船舶ニ対シテハ、当警察署ヨリ充分ナル注意ヲ加フルコトト相成居候、依テ此際各自ニ於テ不良ノ飲食、不熟ノ果物ヲ飲食セス、暴飲暴食ヲ為サス、又腹部ヲ冷サハル等万事ニ注意ヲ加ヘ、感染又ハ特発ノ不幸ニ陥ラサル様、部下人民ヘ無洩周知方取計可有之候、尤モ本件ニ關シテハ知事ヨリ告示諭告等可有之筈ニ候得共不取敢此段及通達候也

明治廿五年八月廿九日

八重山島府

上の記事から、宮古島でコレラの患者が8名、疑似症患者2名の発生があり、そのうち5名が死亡し、なおコレラ蔓延の恐れがあるといった状況が分かる。通達は宮古・八重山間では船舶交通があるので、コレラの侵入に備え、宮古島からの船舶に注意するようにというものである。「感染又ハ特発ノ不幸ニ陥ラサル」ため、特に飲食物に注意を払い、腹部を冷やさな

いことを対策として特記している。

『琉球新報』10月19日付に、「去る8月23日以来一昨十七日至る県下各郡区のコレラ患者の統計」が発表されている。沖縄県内で327人（疑似患者も含む）の患者が確認されているが、八重山地域では1人も患者を出していない。しかし、『琉球新報』1903年（同36）1月15日付には、「与那国コレラ」の見出しで、与那国で23名（このうち13名死亡）の患者数が報道されているので、既にコレラの八重山地域への侵入が本格化していることが分かる。4月10日には、当時の沖縄警察部警部長であり、検疫委員長の和田勇から八重山島司・野村道安へ通達があり、「伝染病予防上最モ主要ノ事項」として、特に水に関する事項が「下水」と「飲料水」に分けて記され、注意を促している（「島府通達綴」No.57）。

『琉球新報』9月23日付では、沖縄県内の「初発以来一昨21日に至るコレラ患者の累計」が、「那霸」「首里」「島尻」「中頭」「宮古」「八重山」の地域別に患者数が発表された。患者は合計40名ということで、全県的に減少傾向にあるが、八重山地域は23人（すべて疑似患者）の患者が確認されており、そのうち13人が死亡している。

1903年から1904年にかけて、感染症・伝染病に関する次のような通達が波照間島に届いている。

- ・「目下ペスト病蔓延ノ模様有之予防ノ件ニ關シ通達ノ件」（八重山島府1903年10月19日付、「島府通達綴」No.75）、
- ・「伝染病予防ニ關スル衛生上獎励ノ件」（八重山島司 黒川作助1904年5月12日付、「島府通達綴」No.112）。
- ・「伝染病予防ノ件」。八重山島司（黒川作助、1904年12月14日付、「島府通達綴」

八重山・宮古地方に課せられた人頭税は1903年に廃止されたが、八重山社会は感染症への対応でまだまだ落ち着きのない状況だったのではないか。

(2)大正時代のインフルエンザ（西表島網取村）

1916年（大正5）に悪性感冒（インフルエンザ）が西表島の網取村に大流行したことが、『わが故郷アントウリー西表・網取村の民俗と古謡一』（著／山田武男、編／安渓遊地・安渓貴子）に「川平永美さんと山田雪さんのお話」として収録されている。人口120人の村人のうち、たちまち100人が病床に伏したとのことである。大正時代に交通の不便な無医村で起こった惨劇を、このコロナ禍のさなかに読むと、その恐ろしさがよりリアルに伝わってくる。甚だ長い引用になるが、貴重な証言なので、ここに引いておくことにする。

大正五年に悪性の感冒が網取村に大流行した。今思い出してもぞつとする」と言いながら、^{かびら}川平永美さんと山田雪さんは語ってくれた。

感冒流行の時は永美さんは14歳だった。「14歳にしてよくも病人を看護し面倒を見れたものだ」と自負される。一番最初に感冒にかかったのは伊泊イシガというおばあさんで家族に次々と感染し、あつという間に村全体に蔓延した。交通の便も悪く、陸の孤島として孤立していた村なので医者に診てもらいたくても医療設備すらなく、人々はただ神に祈るほかすべがなかった。当時の村の戸数は23戸、人口120人余だったが、其の23戸100人以上の人々がたちまちの間に病床に伏してしまった。元気に動けるのは永美さんと、山田

満慶、嘉弥真鶴千代（のちの入伊泊清光綱取小中学校校長）の3人。3人は恐怖の余りろくろく眠ることができなかつた。

なんとかしてこの難関を乗り超えねばと毎日かわり番に病床を見舞つた。幸い軽症の患者は、やつと這いながらでも自分の家族の面倒を見た。お互いにはげましあいながら頑張らねばならなかつた。7日目にとうとう死者がでた。最初に病床についた伊泊イシガばあさんだつた。次々と伊泊家から3人の死者が出た。新城、嘉弥真。村仲と病床に就いた順に死んでいく。ほんとうに怖かつた。一日に3人の人が亡くなつた時には身の毛がよだつ思いがした。今でもその時のことが脳裏にこびりついている。夜になると淋しくて遠くで梟が鳴く。明日もまたどうなることかと考えたものだつた。4、5日は毎日のように葬式があり、元気なのは3人だけなので棺桶を作る暇がなかつた。致しかたなく毛布にくるんで埋葬された方もあった。ああ、なんたる残酷なことだろう。いつ自分達も……と考えるとぞつとした。

二週間が過ぎ、悪性感冒も次第におさまってきた様子で、永美さんら三人はどうやら感染から免れたようだつた。悪性感冒で亡くなつた人は八名、伊泊家では一時に3人も亡くなり、それは大変なことだつた。一ヵ月過ぎてやつとお互いの、また村全体の安否を知り、亡くなつた方の冥福を祈つた。ようやく暗黒の世界から這いあがり、村に光明の兆しが訪れ救われた感じがほとばしり、皆で手と手を取り合つて泣いた。熱病がおさまり、村が元の姿を取り戻す事ができたのは、無医村にしてみれば、神の御加護と思われた。

(3)第2次世界大戦後の天然痘（黒島、西表島大原）

吉野高善氏は第2次世界大戦後、八重山支庁長、八重山仮支庁長、八重山民政府知事、初の八重山群島政府知事などを歴任し、政治家として知られるが、石垣町内で南嶋医院を開業し、医者・医学博士としても大きな功績を残している。

著書『ふる里と共に』のなかで、「天然痘の流行」という項目を立て、第2次世界大戦後の黒島で起こった天然痘の流行を記録している。

吉野氏によると、八重山地域では97人の患者のうち28人が死亡している。そのうち黒島の患者が48人を占め12人が死亡し、死亡率は25パーセントに及んでいる。

竹富村黒島の区長玉代勢太郎氏が、黒島の伴古部落にただならぬ病気が発生し、あちらこちらに伝染しつつある、という報告をもたらした。病状をくわしく聞いてみると天然痘らしい。私が大正13年（1923）12月31日、台湾の台北市に天然痘を初めてみたことは、前に述べたとおりである。その時の症状と玉代勢氏の報告とは一致するところがある。すわ一大事だと、直ちに喜友名防疫課長を同伴、黒島に出張することにした。（当時私は衛生部長の職にあった）それは1946年（昭和21）3月25日のことであった。

黒島に渡って、東筋部落の玉代勢氏宅に小憩の後患家を訪ねた。伴古部落は海岸近くにある小さな漁民部落である。診察の結果天然痘であることがはっきりした。この診断がかつて台湾における天然痘患者取扱いの経験が参考になったことはいうまでもない。私がこの患者をみた以前すでに上原某は、2月28日発病して、3月9日死亡しており、その他

に五名も死亡していた。約一ヶ月前から流行していることが明らかになった。その私が診察した患者は10名に達し、実に由々しい問題となつた。

さっそく患者を各々自宅に隔離するとともに、^{ママ}伴古部落全体を隔離地として、他部落すなわち東筋、保里、仲本、宮里との通行を禁止し、青年男女をしてその監視に当たらしめる一方、翌二十六日黒島に対して船舶の入港を禁止して、他に伝染しないよう対策を講じた。

黒島から帰った翌3月27日に、登野城でも新患者を発見し（4名）、隔離舎が無かったので各自宅に隔離したが、外部との交通遮断が完全に行われなつたので、天然痘は登野城にひろがり、大川、石垣、新川にも発生するようになった。5月にはいって仮隔離病舎ができたので、全患者を収容した。それでその後は新患者の発生はあまり見られなかつた。また平得、大浜、西表島の白浜にも発病者があったが、直ちに仮隔離病舎に収容したので多発するに至らなかつた。

このように天然痘の防止対策として、交通止めをし、黒島、石垣からの船舶の出港を禁ずると共に、入港の船舶に対しては厳重なる検疫を施行し、流行地の学校の授業停止、料理屋、床屋、銭湯、芝居等の諸営業を停止させ、各種の集会を厳禁した。

以上のような対策を講ずると同時に、南部琉球軍政府に対して、天然痘の発生詳報を打電し、痘苗の注文をして、予防接種の実施を計画した。軍では特にこれを重視して、30日にはフェーチャー衛生兵が、発動機船で待望の痘苗をたずさえて來たので、直ちにこれを黒島と登野城の部落民に接種し、更に4月3日琉球軍政府から來島したトージンスキ一軍

医大尉、フェーチャー衛生兵と各開業医の協力を得て、10日間（4月12日まで）で全住民に、もれなく予防接種を終了することができた。

この迅速な処置によって、黒島では4月10日から、登野城では6月5日から、新患者の発生が見られなくなって、住民を恐怖のふちにおとしいれた天然痘も、終わりを告げたのである。

この天然痘の流行について感じたことは、もし私が天然痘を取り扱った経験がなく、その診断にいたずらに時を過ごしていたら、どうなっただろうかということである。異常発生を来たして、恐ろしい結果になったのではないかと思う時、われながら過去の経験がこの時よく活かされ、住民を救うことが出来たことは欣快にたえなかった。

医者という立場からの記述には説得力がある。また、台湾での医療経験により適した対応ができたことが理解できる。

同じころ西表島大原では、八重山地域における天然痘の流行を聞きつけ、自警団を組織して水際対策を行なっている。当時の様子は、次の『大原創立55周年記念誌 栄光永えに』から知ることができる。

終戦となるや、特に西表島は面積も大きいとあって、食糧や物を求めてか地域は無法地帯の様相を見せてきた。そこで青年団の強化を図り、自警団という組織を作り部落の治安に備えた。先に述べたように、青年会長、挺身隊長、自警団長を兼務総責を担つた人が舟浮から移住してきた池田登青年であった。（中略）戦後人々が食糧難に喘いでいるところへ、どこから来たのか八重山では運悪く天然

痘という伝染病が石垣に発生したところで、どの島も出入り禁止の状態が三〇日ほど続いた。当地区は幸いにしてイモがあるので、石垣からイモ買う人々が夜昼となく小さな船でちよくちよくやって来た。誰が天然痘を持っているかわからないので、部落内に他の地区の人を入れるわけには行かない。当時は換金になる品もないのに、少しでも良いイモは譲って金にしたいのが人々の心中でもあった。そのような状態をどう守らなければならないのか、当時の自警団の任務警戒も一苦労であった。

3 年中行事にみる悪疫退散の願い

八重山諸島で現在も行なわれている村行事には、シマフサラーとも称する物忌行事がある（『沖縄大百科事典』では「シマクサラシ」で立項）。それは家畜（豚、山羊、馬など）を屠り、その血を注連縄に塗りつけ、それを各家の門や村の境界となる場所に張りめぐらして悪霊や疫病の祓いとするものである。また祭儀では、捕獲したネズミや害虫を、芭蕉の幹で作った小さな筏舟に乗せて浜から沖に向かって流す儀礼もみられる。

宮平盛晃氏は沖縄県内に535例のシマクサラシ儀礼を確認している。その主な目的は災厄の村へ侵入防止であるが、災厄のうち最たるものには「流行病」だという。

事例の一覧表には八重山諸島のシマクサラシ儀礼として34地域が列挙されているが、そのうち竹富町は西表島干立、祖納、船浮、網取、崎山、古見、小浜島、竹富島波座間村、新城上地島、下地島、黒島保里村、宮里村、仲本村、東筋村、鳩間島、波照間島富嘉村、名石村、前村、北村、南村の20地域が数えられる（『琉球諸島

の動物儀礼—シマクサラシ儀礼の民俗学的研究—』)。

ここでは竹富町のシマクサラシ儀礼を諸資料からいくつか拾って紹介することにする。

(1) 干立村

旧暦の10月の壬、癸の日を選んで行われる。この時期は季節の変わり目であり、かぜ等の様々な病気が流行るので、住民の無病息災を祈願する行事である。かつては村の全住民で行う行事であったが、現在では御嶽の関係者の神司、チヂビと公民館の役員のみで行っている。

シマフサラ（10月願）の日は集落の出入り口にしめ縄を張り、この縄の動物の生血で染める。そして、各家々から米、酒、線香を又キトウリムヌ（抜取り物）として徴収し、神司が御嶽で祈願をする。この祈願が済むと村の清めの後に浜で火を焚き、芭蕉で舟を造り、それに米、酒、水等を載せ、村中の悪病を持ち去ってくれと願いながらこの舟を沖に流す。

「シマフサラ」（十月願い）『節祭』（竹富町教育委員会）



（干立村、シマフサラ）

旧暦10月の年に一回、シマフサラ、あるいはジュウガツニガイ（10月願い）と呼ばれる年中行事がある。かつては、村落の男性役員らが、村落への入口に動物の血をぬった縄を張り、塩とニンニクを包んだ葉を張り渡し

たという。これによって疫病などの災厄ほどの村落への侵入を防ぐとされる。村落内の特定の十字路では大きな鍋を使い動物を料理し、老若男女、村中の人々が集まって共食した。動物は鶏を使ったが、古くは牛であった。

ツカサたちは、村のウタキ、村落入口、浜辺などで、肉雑炊、酒、米などを供え、祈願を行った。今から七〇年ほど前まで、儀礼に用いる少量の縄に身につけたツカサたちが、村落内の災厄を払う行為が行われていた。当日の夕方、薄暗くなってきた頃、マジムンを村落から追い払うため、ツカサたちが両手に持ったヒノキガイ（貝）を叩き合わせ、大きな声で「ユートウンパーレー」、「ウラウラウラ。マジムヌよー」、「逃げた逃げたー。こっちこっちー」と言いながら、村落内を走つて回った。最後、ツカサたちは浜辺へ行き、身につけていた縄を焼却したという。ツカサの巡回を見てはいけないといった禁忌はなかった。村落内での除災は無くなったものの、儀礼の終盤にツカサたちが縄を身につけ、外したものを見付ける行為は現在も残っている。

宮平盛晃『琉球諸島の動物儀礼』

(2) 網取村

シマフサラというのは、生き物を殺してその動物の血や臭いで村全体を覆い隠すことである。二月に入るとカザマリ（廻り風）といい、急に風が吹き海がひどく荒れることが度々ある。風波のために難破船が漂流して村の浜に打ち上げられたり、疫病の流行で村人が苦労することが度重なり、これを予防するためのまじないとして行うのがシマフサラである。

網取村は医師がいないうえに孤立してお

り、シマフサラなる行事は昔から悪病を恐れてきた村人の心の支えだった。旧暦の四月、癸酉の日を選び、その二日前にお嶽への願かけが始まる。願掛けの日は、日暮とともに銅鑼や太鼓の合図で若者が一ヶ所に集まり、手にはカブリキ（和名オオバイヌビワ）の枝を持って家々の雨戸をたたきながら小走りに「ユートゥーパーレー マジョーヌノパーレー アンガレーパーレー」とくまなく廻る。その意味を昔の方々に尋ねても「自分等もただ習い覚えた事を君等に伝授しているだけだ」と言われるだけではっきりした事がわからない。二日目も同じ事が早朝と夕方の二回おこなわれる。三日目の最後の日には村人全員が参加する。お年寄りはボージナつくりをする。若者は血を探るために鶏を殺す者と、芭蕉の舟をつくる者とに分かれる。ボージナは藁を七本五本三本と取り、一尺の間隔でないあげた縄のことで、その中間にピンドウ（藁を小づかみにして二つに折り曲げきちんと結わえ約五寸に切ったもの）をつるし血をたっぷり含ませてさげる。芭蕉の舟は長さ三尺くらいの三本の芭蕉の幹を結わえ筏をつくる。すべての準備ができあがると、後は神女がお嶽から帰るのを待つ。祈願に使われたチカンパナ（掴み米）が神女から届くと、血を探った鶏の肉でだしをとりズーサー（混ぜ御飯）を炊く。いよいよ悪霊追い出しのユートゥーパーレーにかかる。一軒一軒くまなく追い出し、家々の入り口にボージナを張る。空き屋敷や村人がウダチと呼ぶ村の出入り口も悪霊追い出しをし、ボージナを張る。追い出した悪霊は芭蕉の舟に乗ってもらい、水やお米、ズーサーのお握り、果物等が舟に積まれ、西方のかなたなる大国に渡航と相成る。中年の人から選らばれた舟出し役が二、三人

の若者を伴って網取の前のユシキバラという小島に渡り、そこから舟を出して三日間の行事を終了する。

『わが故郷アントゥリー西表・網取村の民俗と古謡一』

(著／山田武男、編／安渓遊地・安渓貴子)

10月はバナシキツーサリキ（風邪がひどいから）といって、バナシキヌニガイ（風邪の願い）とシマフサラヌニガイ（島腐らしの願い）を同時にします。風邪、特にこのころはやる流行性感冒にかかるないように祈願するんですよ。

マンサンの日（しかるべき日取り）に豚を殺してその血を採ります。普通と逆向きの左縄に縄をなって七つ・五つ・三つずつ藁の先を出したものをはさみながらいます。七・五・三の藁の間は一尺ずつほど空けます。縄のまん中に当たる所に殺した豚の血をつけます。これを村の出入口、家の入口、田んぼへの道にも張り渡します。悪いものが村の中に入ってこないように、バナシキブイ（風邪追い）といってバナシキ（風邪）を追い払うのです。一〇月は火事と風邪ひきのないように同時にやります。

（祈願の供物は（編者注）各家から米を出し、浜で殺した豚の肉と米でズーサー（混ぜご飯）を炊きます。これでパチ（お握り）をつくります。パチとグシ（お酒）、パナグミ（花米、洗った白米）も入れてバナシキヌニガイとして小舟を作つて海に流します。これをシマフサラヌニガイとも言います。残ったズーサーは各家に分けます。

『西表島に生きる—おばあちゃんの自然生活誌一』

(述／山田雪子、編／安渓遊地・安渓貴子)

(3) 崎山村

シマフサラ。これは「島腐ら」という意味で、牛や豚その他色々な動物をつぶして村を腐らせるということです。なぜ動物をつぶすかということですが、この臭いで流行病を近寄せないと聞かされています。

各戸が線香とつかみ米を集めて神司にさしあげます。神司はこれを持って御嶽に行き「今日から村中の人人が病気の神を追い出しますので、神様も御承知なさって村から病気の神を追い出して下さい」と祈ります。村人は村の出入口に七・五・三本づつわらしふをさげたしめ縄を張ります。縄の中央にわらで作ったちよんまげのようなものを作り、これの下の方に動物の血をぬり、七・五・三のしめ縄の中央部に結びつけます。神司が御嶽から帰ると、若い人は四・五人の組をつくりどらをたたいて各戸をまわります。三日間朝晩二回づつまわり、三日目は若い人は各戸をまわり、残りの人はバサ（イトバショウ）の幹で舟を作り、各戸からもらってきた色々なものや、ご飯の初をのせて送り出します。これでシマフサラの行事は終ります。

「10月の行事」『崎山節のふるさと—西表島の歌と昔話—』

（述／川平永美、編／安渥遊地・安渥貴子）

(4) 小浜島

昔も今も流行疫病が押し寄せる社会に不安と人心の動搖をもたらすことに変わりはない。悪性感冒でも流行するとそのまん延を恐れて、住民の健康保全を維持する為めに、役職者は率先して、神司を中心に物議をかもす。

各おがんでは神司を始め女連中が夜ごもり祈願を捧げる。最終的に結びの祭りごとが展開される。衆落内（人家）の悪疫を追払うという神行事である。どうはんだにんがい（健

康祈願）と称される五やま（五つのおがん）の神司連が合流して堵列を組んで白の神衣装をまとい頭には芝八巻を締めて厳粛にさか木の枝を振り振り邑の外れへ追払い邑の出入口に注連縄を張り明かすのである。此れの堵列隊に出逢うことは悪霊に取り付かれるとして恐れ警戒したものである。はなすきス（悪疫）追い退けの神行事であって、その趣旨は尊いもので重々しく行なわれていた過去のものである。今は非科学的だとの考え方立って顧みられなくなっているが、昔日の無医村の実情ではこれ以外に取り為す術も無く生命保全を図る為め自ずから発想され、迷信とは言え島の祭政の立場から進められていたと解釈される。毎年二月と十月にたかび願いという祭事になって存続されて神前祈願がなされているのは、同趣旨の祭事である。

山城浩「悪疫追払いの祭事（どうはんだにんがい）」

『小浜島誌』

(5) 新城上地島

豚やヤギを屠して氏神に供え、村に疫病が流行しないように祈願した。各家庭では、しめ縄を門に張り、束ねた藁を7、8寸くらいに切って、その切り口を豚かヤギの血で染めて、門のしめ縄の中央に紐で吊るした。部落への通路の出入口にも同様にした。この行事は、疫病の発生しやすい夏から秋への季節の変わり目に、疫病を防ぐために行われた。

「シキメフサリ」『竹富町史 第五卷 新城島』

(6) 黒島

ユウドバナシチ
10月は気候の変り期で色々の流行風邪、タカヌパナシキと流行病がはやるので牛や山羊の匂の臭いのを殺して其の肉で祈願して流行病を追放する意である。嶽へは酒肉一皿（雑

穀ノ取り花米) 間線道路、農道の出入口、各戸門口にシメ縄を張り出入口に祈願。

幸地厚吉「島さあら願(悪疫払い)」

『さふじま 一黒島の民話・謡・諺集』

(7) 鳩間島

悪霊・災厄祓い。パナシキヌカン(疫病神)を祓う。海浜から集落に通じる道の入口に藁縄で作ったシビナージナ(注連縄)を張る。豚や鶏をつぶし、その血をシビナージナに塗りつける。午後、銅鑼を打ち鳴らす公民館役員に引率された子どもたちが、手に手に瓦や甕の破片を持って村の井戸に集まる。銅鑼の音を合図に、子どもたちは一斉に両手に持った破片を打ち鳴らしながら「イソーパーレパーレ」と大声をあげて、井戸の悪霊を祓う(カーザライという)。その後、子どもたちは行列をなして破片を打ち鳴らし、イソーパーレパーレと大声をあげながら各家を廻って祓い(ヤーザライという)浜へ行く。浜に到着すると手に持っていた破片を海中に投げ捨てて、悪霊・災厄を海の彼方へ追いやる。浜辺にはサカサと公民館役員らがいて、豚や鶏の料理を皿に盛ったものと酒を供えて海に向かって、悪霊・災厄祓いと村人の健康祈願を行う。このとき「ミーシキ、パナシキ、ペラシッフォーンナ(疫病、風邪を入れないでください)」という祝詞を唱える。夜は「ユートパーレー」が行われる。「ユートパーレーミーソッファーほ」と言って各家から味噌をもらっていたが、これには子どもは参加しない。

『シマッサル』『竹富町史 第六巻 鳩間島』

(8) 波照間島

疫病祓いと健康長寿の祈願。各家から集め

られたコーパナ(線香と花米)を神前に供えて祈願する。以前は、角のある動物の生血をぬった注連縄に毛皮をくくりつけ、村の出入口に張り巡らせた。生肉の一部を小舟に乗せ、沖へ流す儀式によって疫病を島外に追い払った。

「シマフサラー」『竹富町史 第七巻 波照間島』

結びにかえて

ここまで感染症の水際対策を中心にアレコレみてきた。それによって感染症と海・港とのつながりが再確認できた。竹富町にとって水際対策は大切だ。島々の港は外部から訪れる人や物流の玄関口であるが、病気やウイルスもまた港から入ってくるのである。

また現在、社会的には徹底してウイルスを排除する段階から、コロナ後の世界はウイルスと共生していく段階にシフトしてきたといえる。

伝統的な年中行事にみる悪疫退散の祈願(シマクサラシ儀礼)は、一見すると島から悪疫・害虫などをいかにも追い出すかのように見える。しかし、海へ流す害虫の乗った小舟にご馳走まで載せていることを思うと、害虫を単に敵対視するのではなく、ニライ・カナイの国へ丁重に送り届ける意味とも読み取れる。民話にみる病魔の神と村人との交渉にもほのぼのとしたものがある。

これらからみえてくる悪疫との応対は、現在進行中のコロナ禍と向き合って暮らしていく上で、示唆に富むものではないだろうか。日常生活がなかなか落ち着かない状況だが、科学的・医学的な情報・予防・治療も並行しながら、「with コロナ!」(コロナとの共生)に心がけたいものである。

(飯田泰彦)

《殿様節》西表島・船浮



2019年、新たに改修された「殿様節之歌碑」これまで殿様節を多くの人に伝えてきた「かまどま之碑」を改修し、新たに「殿様節之碑」とした

殿様節の由緒

カマドマは船浮村の生まれで、絶世の美女として当時の役人から望まれた女性である。殿様は祖納村の石垣高端である。生まれつきの美男子で、大和の殿様とあだ名された様であった。

この二人の恋い物語を歌ったのが「殿様節」である。石垣高端は明和6年5月4日生まれで、文化元年（1804年）船浮役人を命ぜられカマドマに心酔したが、文化2年祖納村紙漉所役人になられた。その時の二人の様子を石垣用典氏が作歌したものである。

（殿様節之歌碑より）

船浮集落は、西表島の集落の一つであるが、一般的な交通手段としては県道の最終地点である白浜集落から船で渡るしかない。白浜港からの所用時間は約10分。内離島をぐるりと回りこんだ後に、船浮集落は存在している。陸続きでありながら、船でしか行くことができないため、陸の孤島と表現されることもある。近年では、シンガーソングライターの池田卓氏が企画する「船浮音祭り」の開催により、県内外からも注目を集めている。

1. 歌詞について

さて、この船浮を代表する唄の一つに《殿様節》がある。

（歌意）

浮世に名とうたる恋の氏神

世間に名をとどろかせて 恋の氏神と囁され

祖納の殿様 我んどうやゆる

祖納の殿様と呼ばれているのは私のことだ

カマドマぬ事ば思いどう

カマドーマ女のこと恋慕って

船浮に行くよば

船浮に行くところだよ、私は

島の役人と、島の娘カマドマの恋をうたった民謡である。曲は15番に及んでおり、物語りとしての歌詞の面白みも感じられる。

喜舎場永珣によれば「殿様とは、祖納村の石垣高端氏のニックネームで、彼は頭が禿げており、大和の殿様の月代の様だともてはやされていた。氏は八重山で小町娘と評判の高い「カマドマ」という美人を貢女としていた。この唄は、2人の恋愛実情を知り尽くし、大和歌にも精通していた「石垣用典」の作」（※1）といわれ、1817年につくられたというのだから、今から約200年前の話といえる。また「用典氏は、歌中に「恋の氏神」「時の辛酸」「大和ヌ業平」「殿様」「千秋万歳」「風姿」とか日本の国語を使用してある。なかでも八重山民謡に「恋」の文字を使用しているのはこの歌一つしかない。これからみても用典氏は和歌の名人であったことが証明される」（※1）と述べている。

ところで、船浮、祖納、干立に伝わる節祭の中で歌われる歌は、やまと言葉がそのまま使われてい

る部分が多い。《殿様節》の歌詞に日本の国語が使用されているという点と、節祭の歌がやまと言葉で歌われていることの共通点が挙げられている文献をみつけることはできなかった。しかし、節祭が500年、《殿様節》が200年の歴史と伝えられているなら、《殿様節》が節祭の影響を受けて作られているとも考えられる。《殿様節》の歌詞と、節祭の歌の比較については今後の課題としたい。

2. 曲調について

《殿様節》には、「本調子と二揚調の二通りの歌い方があり、普段は舞踊曲として二揚調の早調子の曲で弾唱されることが多い。本調子の曲は、一般に二揚調・早調子の曲とはまったく趣を異にする」(※2)。また「二揚調は、高度な技量が求められる難曲」(※3)といわれるが、二揚調・早調子はその軽快な旋律により、「まるま盆山」のちらしとして踊られることもあり、八重山民謡ではなじみの曲である。

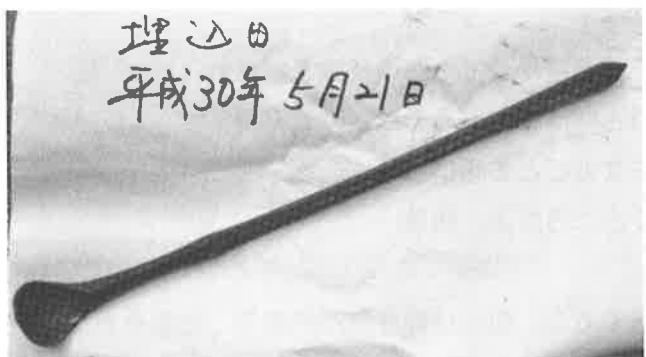
船浮小中学校では《殿様節》を、運動会の婦人参加競技として種目に取り入れている。手作りの四つ竹を手に、日焼けに配慮した出で立ちのご婦人方（たまに男性も）が、大きな円を描きながら入場。中心でお手本となるのは、地元船浮乙女の面々である。

この日のために手入れされた緑の校庭に、《殿様節》の三線の軽快なリズムと四つ竹の音が響く様子は、アンバランスなように見えるが、開放的で物語の舞台であることを見分に感じられる。そこには、御嶽や祭祀の空間、劇場や会館などの舞台で踊られる舞踊とは違う島の空気がある。



船浮小中学校運動会で踊られる《殿様節》

3. カマドマのジーファー（かんざし）



「殿様節之歌碑」に埋設されているかんざし 長さ21cm、重さ50.9gの真鍮製。「カマドマのジーファ」と伝えられている。(『殿様節之歌碑改修落成記念誌』)

2019年「殿様節之歌碑」が改修された。碑の一段目には、真鍮のジーファー（かんざし）が埋め込まれている。ジーファーのいわれは『殿様節之歌碑改修落成記念誌』(※4)に記されている。要約すると、次のとおりだ。

1966年船浮集落の護岸工事で働いていた池田稔氏が、工事の最中に浜で発見したのが、真鍮製のジーファーであった。そのジーファーを、竹富島の喜宝院初代館長上勢頭亨氏に鑑定してもらったところ、「高位の方が持っていたものであろう」といわれた。さらに、「高値で譲り受けたい」との申し出もあったというが、池田氏は「カマドマのものではないか」と解釈し、カマドマが役人を待ち続けたと伝えられるクバデーサ（モモタマナ）の木陰に碑を造りその中に保存したのだという。はたしてそれが、カマドマのものかどうかはわからないが、「カマドマのジーファー」が、200年という歴史、カマドマと殿様の物語にリアリティーとロマンを与えてくれるアイテムであることは間違いない。

(米盛恭子)

【注記】

- (※1) 喜舎場永均『八重山民謡誌』(沖縄タイムス社、1967年) 344~351頁
- (※2) 當山善堂『精選八重山古典民謡集(三)』(文進印刷、2011年) 219頁
- (※3) 當山善堂『精選八重山古典民謡集(四)』(丸正印刷、2013年) 120頁
- (※4) 『殿様節之歌碑改修落成記念誌』(殿様節之歌碑改修期成会発行、2019年)

【参考資料】

- ・石垣金星「殿様節」『西表民謡誌と工工四』(西表をほりおこす会、2006年) 51~59頁
- ・「船浮の恋物語新たな装いに かんざし保管に地域住民「念願かなった」「かまどま之碑」→「殿様節之歌碑」に改修(『八重山毎日新聞』2018年6月4日付) 参照

【写真提供】 船浮小中学校

こぼれななし



船浮小中学校では、今年度の学習発表会で《殿様節》をモチーフに、劇『船浮太郎一かまどま姫との出会い』を発表した。現在（2021年3月）の児童生徒の在籍は、小学校1名、中学校1名である。学習発表会では「合奏」「合唱」「海洋学習の実践発表」「ピアノ演奏」「船浮の棒術」「殿様節」など、盛り沢山のプログラムだった。「かまどま姫と船浮太郎」の物語にアレンジされた劇では、セマルハコガメやカンムリワシに扮した応援の教職員も登場するなど、独自の台本で演じる姿に大きな拍手が送られた。

【学校の概要】

大正13年船浮部落学校として設立されたことに始まる。

その後、西表尋常小学校仮教場となり、先の大戦時まで児童の教育を行った。昭和24年、中学校が設立され西表小中学校分教場となり、昭和32年白浜小中学校分校より独立、船浮小中学校となった。児童・生徒数は安定しておらず、幾度か廃校の危機にさらされたこともある。2020年度、創立96年の学校として、地域と支え合いながら伝統を受け継いでいる。
—船浮小中学校ホームページ2021年3月10日付 参照—



船浮に関する資料

発行年	タ イ ド ル	編 ・ 著	出	典	発 行 所
1950	「船浮港」445頁	東恩納寛惇	「南島風土記」		沖縄郷土文化研究会 南島文化資料研究室
1967	「殿様節」344～351頁	喜舎場永珣	「八重山民謡誌」		沖縄タイムス社
1967	「石ぬ屏風節」378～379頁	喜舎場永珣	「八重山民謡誌」		沖縄タイムス社
1974	「船浮ジラバ」1頁	仲宗根長一	「八重山民謡ユンタ端節曲集工工四」		仲宗根長一
1974	9. 部落の綽名 「船浮ーフネカミ (船浮亀)」 33～35頁	那根亨	「西表島の伝説」		那根亨
1977	「石ぬ屏風節 (船浮)」 105～106頁 「殿様節 (船浮)」 10 6～112頁	竹富町文化財保護審議会 編著	「竹富町の無形文化財」		竹富町教育委員会
1978	「船浮のヤエヤマハマゴウ」 231頁	佐久田繁 編集	「おきなわ文化財図鑑一国・県指定及び選択一」		月刊沖縄社
1980	第二章 民俗物語 「船浮かまどまのすり路峠」 55～56頁 第 六章 民族の踊芸能 「かーみぬ手いほん (船浮)」 215～218頁	星勲	「西表島のむかし話」		ひるぎ社
1981	「殿様節考・舟浮力マドを想う」〈上〉〈下〉	亀川紀代	「八重山毎日新聞」		八重山毎日新聞社
1981	「船浮村と内離島潮潟声石」 21頁	沖縄県教育委員会	「沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI」〈沖 縄県天然記念物調査シリーズ第21集〉		沖縄県教育委員会
1981	「船浮村と内離島潮潟声石」 21頁	星勲	「西表島の民俗」		友古堂書店
1982	「舟浮、綱取部落にやつと無線電話」 252～254頁、「舟 浮水難救護所設置」 347～350頁	瀬戸弘	「竹富町の島々と共に」		瀬戸弘
1982	「舟浮村」 56～59頁	星勲	「西表島の村落と方言」		友古堂書店
1983	「舟浮」 384頁	牧野清	「沖縄大百科事典」〈下巻〉		沖縄タイムス社
1983	「舟浮港」 385頁	崎山直	「沖縄大百科事典」〈下巻〉		沖縄タイムス社
1983	「舟浮のヤエヤマハマゴウ」 385頁	日越国昭	「沖縄大百科事典」〈下巻〉		沖縄タイムス社
1983	「石の屏風節」 178頁	祖慶剛	「沖縄大百科事典」〈上巻〉		沖縄タイムス社
1983	「殿様節」 955頁	森田係栄	「沖縄大百科事典」〈中巻〉		沖縄タイムス社
1984	「学校要覧 昭和59学年度」(竹富町立船浮小中学校)	沖縄県編	「学校要覧 昭和59学年度」		竹富町立船浮小中学校
1985	「10 フナウキワガシ」 181頁	沖縄県教育委員会編	「御嶽 御嶽御嶽信仰習俗分布調査 II」		沖縄県教育委員会
1985	「舟浮の黒真珠養殖場」 19・56・57頁	平井順光	「角川日本地名大辞典 47沖縄県」		平井順光写真事務所
1986	「舟浮村」 614頁、「舟浮灣」 615頁	角川日本地名大辞典 編纂委員会 竹内理三	「角川日本地名大辞典 47沖縄県」		角川書店
1990	「西表島崎山半島 (舟浮) の植物相」 37～85頁	島袋敬一、新城和治、横 田昌嗣	「南西諸島における野生生物の種の保存 に不可欠な諸条件に関する研究 平成元 年度西表島崎山半島地域調査報告書」世 界自然保護基金日本委員会編		環境庁自然保護局

発行年	タ イ ト ル	編	著	出	典	発 行 所
1990	「船浮御嶽」414～415頁	牧野清		『八重山のお嶽』		あーまん企画
1990	「石ぬ屏風節」29頁、「殿様節」82頁	糸瀬長良		『八重山古民謡・古謡全集－五線譜・工工四併記』		糸瀬長良
1993	「戦時アルバム 下永部隊・舟浮国防婦人会」4頁	竹富町史編集室		『竹富町史だより』〈第3号〉		竹富町史編集室
1993	『戦跡をたずねて』6頁	通事孝作		『竹富町史だより』〈第3号〉		竹富町史編集室
1993	「舟浮・網取・崎山」263～274頁	竹富町史編集委員会		『竹富町史一別巻3』写真集 しまじまー写真にみる竹富町のあゆみ -』	『ばいぬ	竹富町役場 町史編集室
1994	「灯台記念日に船浮子供会が体験航海」5頁	竹富町役場企画課		『広報 たけとみちよう』〈197号〉		竹富町役場企画課
1995	「船浮小中学校で「ともだちコンサート」」7頁	竹富町役場企画課		『広報 たけとみちよう』〈205号〉		竹富町役場企画課
1995	「船浮要塞」158～160頁、「船浮陸軍病院」161頁、「船 浮集落」163頁	大田静男		『八重山の戦争』		南山倉
1996	「《線跡をたずねて》－船浮の海軍壕跡－」17頁	竹富町史編集室		『竹富町史だより』〈第9号〉		竹富町史編集室
1996	「戦さ場の実相一島じまの語り部たち－船浮要塞の建設 4頁」	嘉弥真慶吉		『竹富町史だより』〈第10号〉		竹富町史編集室
1996	「第1章 住民の戦争体験記録（舟浮）」738～777頁	竹富町史編集委員会町史 編集室		『竹富町史』〈第12巻 資料編 戰争体 験記録〉		竹富町役場
1996	「新入学児ゼロ解消で意見交換～船浮地区～」5頁	竹富町役場企画課		『広報 たけとみちよう』〈212号〉		竹富町役場企画課
1996	「船浮－白浜－網取に新造船が就航」7頁	竹富町役場企画課		『広報 たけとみちよう』〈219号〉		竹富町役場企画課
1997	「船浮小中学校に体育館落成」4頁	竹富町役場企画課		『広報 たけとみちよう』〈227号〉		竹富町役場企画課
1998	写真53（98～101頁）	竹富町制施行50周年記念誌 編集委員会 竹富町史 編集室		竹富町制施行50周年記念誌『ばいぬしま じま50』		竹富町
1999	「船浮村」48頁、「船浮遺跡」150頁、「船浮力マドマ」 16頁、「船浮小中学校」206頁、「船浮港灯台」248頁	崎原恒新		『八重山ジャンルごと小事典』		ボーダーインク
1999	「竹富町史資料集「鉄田日記」発刊へ－戦時資料として 編集作業進む－」1頁	竹富町史編集室		『竹富町史だより』〈第16号〉		竹富町史編集室
2000	『鉄田義司日記－舟浮要塞重砲兵連隊の軌跡－』	竹富町史編集室		『鉄田義司日記－舟浮要塞重砲兵連隊の 軌跡－』		竹富町役場
2000	「ヤフぬ手」259～260頁、「舟漕ぎ歌」261～262頁、「種 子取り・あよー」262～268頁、「ぬぼるもーさ」268～ 269頁、「魚ぬ・ゆんぐどう」269～270頁、「牛ぬ・ゆ んぐどう」271頁、「桃ぬ・ゆんぐとう」272～273頁、 「米穂らばぬ・ゆんぐとう」273～274頁、「米神酒・あ よー」274～277頁、「みだし・あよー」278～280頁	池田豊吉		『竹富町古謡集』〈第三集〉		竹富町教育委員会

発行年	タ イ ト ル	編 * 著	出	典	発 行 所
2000	コラム 唐獅子「殿様節」	飯田泰彦	『沖縄タイムス』		沖縄タイムス社
2000	「資料集①『鉄田義司日記』を発刊－八重山戦を知る貴重な同時代資料－」1～2頁	竹富町史編集室	『竹富町史だより』〈第18号〉		竹富町史編集室
2001	「舟浮湾の戦争遺跡」81～87頁	大城将保	『西表島総合調査報告書 自然・考古・歴史・民族・美術工芸』		沖縄県立博物館
2001	「舟浮・祖納・千立の古謡一節祭（シチイ）のうたを中心にして」	杉本信夫	『八重山、竹富町調査報告書3－地域シリーズ』〈№29〉		沖縄国際大学南島文化研究所
2001	『鉄田義司日記』（補遺）7～8頁	通事孝作	『竹富町史だより』〈第20号〉		竹富町史編集室
2002	「舟浮湾」713頁、「舟浮要塞跡」713頁、「舟浮村」714頁	平凡社地方資料センター	『日本歴史地名体系第48 沖縄県の地名』		平凡社
2002	「くみぬ鳥」237～238頁、「五尺手」238～239頁、「船ハイ」240～242頁、「あばれ」242～244頁、「ちぬ皿」244～246頁、「中皿」246～247頁	池田豊吉	『竹富町古謡集』〈第四集〉		竹富町教育委員会
2002	コラム 南風「池田卓」	青木誠	『琉球新報』		琉球新報社
2002	「船浮－雨の中盛大に豊作を祝う－」5頁	竹富町役場企画課	『広報 たけとみちょう』〈276号〉		竹富町役場企画課
2003	コラム 南風「西表島船浮の交流」	石垣久雄	『琉球新報』		琉球新報社
2004	「池田卓」212～213頁	文／石盛こずえ	『八重山人の肖像』		南山舎
2004	コラム 落ち穂「船浮要塞と御嶽」	通事孝作	『琉球新報』		琉球新報社
2005	「インタビューノ八重山×人 No.19 池田卓」14～15頁	聞き手 編集部	『情報やいま』〈2005年8月号第141号〉		南山舎
2005	「ヤーラーヨー」197～199頁、「大野茅・ユングトウ」199～202頁、「川原の端の小蛙ユングトウ」202～204頁	石垣久雄	『竹富町古謡集』〈第五集〉		竹富町教育委員会
2006	「舟浮の民謡21 石ぬ屏風節」123～126頁、「舟浮の民謡8 殿様節」51～59頁	石垣金星	『西表民謡と工工四』		西表をほりおこす会
2006	「うるまくらぶ 今月の唱者－池田卓－」58～59頁	聞き手 編集部	『うるま』〈2006年5月号〉		(有)三浦クリエイティブ
2006	コラム 落ち穂「船浮のはなし」	松永朋哉	『琉球新報』		琉球新報社
2007	特集1・21世紀初頭のしまうた～沖縄音楽の現在～「八重山」を歌い継ぐ－池田卓－ 20～21頁	聞き手 編集部	『カラカラ』〈Vo. 23〉		伽楽可楽
2008	「家たちから学ぶもの－船浮集落で何十年ぶりかの新築儀式－」17頁	池田克史	『情報やいま』〈2008年4月号 通巻178号〉		南山舎
2008	「西表島船浮と飛驒山之村の子どもたちの将来のため」35頁	山田ゆかり	『情報やいま』〈2008年4月号 通巻178号〉		南山舎

発行年	タ イ ト ル	編	著	出	典	発 行 所
2008	『舟浮の娘・屋比久少将の死 舟浮の娘』	与座岳生		『舟浮の娘・屋比久少将の死 舟浮の娘』		新星出版
2008	やいまーる広場 「新造船とともにやつくる観光ブーム」17頁	池田克史		『情報やいま』(2008年5月号)		南山舎
2008	やいまーる広場 「船浮小中学校」23頁	編集部要本		『情報やいま』(2008年5月号)		南山舎
2008	西表西部地域づくりと觀光「船浮音まつり」で島おこし』13頁		南山舎	『情報やいま』(2008年6月号)		南山舎
2008	やいまーる広場 「村の歴史に残る大イベント」24頁	池田克史		『情報やいま』(2008年6月号)		南山舎
2008	やいまーるヤマカル通信 「みんなマメなかな~」47頁	清水和弥		『情報やいま』(2008年6月号)		南山舎
2009	やいまーる広場 「地域あげての退職激励パーティー」35頁、	池田克史		『情報やいま』(2009年5月号)		南山舎
2009	やいま NEWS ダイジェスト 「第3回船浮音祭り」17頁		南山舎	『情報やいま』(2009年6月号)		南山舎
2010	「船浮で生まれたからこそ今の僕があり、歌がある」3頁、231頁	池田卓		『Coralway』(2010年清明(3.4月)号) 機内誌	日本トランスオーシャン航空社	
2010	「うないインタビュー この人の素顔－池田卓－」23～26頁		聞き手 長嶺陽子	『うない』(2010年9・10月号 第125号)	琉球新報社	
2010	「インターナショナル八重山×人 №135 池田卓」20頁		聞き手 栗本浩平	『やいま』(2010年4月号)	南山舎	
2010	西表島夕方島時間 「船浮タケノコ採り」7頁、やいまーる広場 「西表島情報フリーペーパー発刊」49頁		南山舎	『情報やいま』(2010年5月号)	南山舎	
2010	やいま NEWS ダイジェスト 「第4回船浮音祭り」18頁		南山舎	『情報やいま』(2010年6月号)	南山舎	
2011	やいま NEWS ダイジェスト 「第5回船浮音祭り」23頁		南山舎	『情報やいま』(2011年6月号)	南山舎	
2012	「島想い－shimaumui－」(写真集) 26. 27. 30. 31. 32. 41. 48. 52. 53. 68. 69. 71. 72. 73. 74. 75頁	山下恒夫		『島想い－shimaumui－』(写真集)	リバーサイドブックス	
2012	やいま NEWS ダイジェスト 「第6回船浮音祭り」14頁		南山舎	『情報やいま』(2012年6月号)	南山舎	
2012	「《文化財探訪》25 北村隊の砲座跡」12頁		通事孝作	『竹富町史だより』(第33号)	竹富町史編集室	
2013	やいま NEWS&TOPICS 「船浮音祭り約600人が来場(第7回)」10頁		南山舎	『情報やいま』(2013年6月号)	南山舎	
2014	インタビュー 「長い旅をして自分らしく表現できる島に帰ってきた－池田卓－」8～10頁		聞き手 たわらまち	『Coralway』(152号2014年5・6月号)	日本トランスオーシャン航空	
2014	やいま NEWS&TOPICS 「船浮音祭り約600人が多彩なステージを堪能(第8回)」12頁		南山舎	『情報やいま』(2014年6月号)	南山舎	
2015	やいま NEWS&TOPICS 「船浮音祭りに約600人が来場(第9回)」2頁		南山舎	『情報やいま』(2015年6月号)	南山舎	
2016	やいま NEWS&TOPICS 「今年で10周年目船浮音祭り大盛況」6頁		南山舎	『情報やいま』(2016年6月号)	南山舎	
2016	むかし八重山 「銘後を支えた船浮国防婦人会」40頁		通事孝作	『情報やいま』(2016年6月号)	南山舎	

発行年	タ イ ド ル	編	著	出 典	発 行 所
2016	「舟浮村」52～53頁	向井進		『千立バシマを語る』	向井進
2017	「沖縄県西表船浮方言」203～206頁	荻野千砂子		『危機的な状況にある言語・方言のアイデンティ化を想定した実地調査研究 平成28年度文化庁委託事業報告書』	琉球大学国産沖縄研究所
2017	特集「池田米蔵と池田卓を一人でやる」10～23頁	聞き手 はいの眺		『月刊やいま』〈2017年7月号第280〉	南山舍
2017	やいま NEWS&TOPICS 「池田卓さん2期目の観光大使に任命」4頁、「船浮音祭り島外から500人が来島(第11回)」6頁	南山舍		『情報やいま』〈2017年6月号〉	南山舍
2019	「船浮御嶽」112～113頁	李春子		『八重山の御嶽－自然と文化－』	(有)榕樹書林
2019	「殿様節之歌碑落成記念誌」	殿様節之歌碑改修期成会		『殿様節之歌碑改修期成会	
2019	やいま NEWS&TOPICS 「船浮音祭り2019に600人が来場(第13回)」4頁	南山舍		『情報やいま』〈2019年6月号〉	南山舍
2019	第19回竹富町民俗芸能発表会 舞踊「殿様節」「舟浮乙女」写真 7頁	竹富町史編集室		『竹富町史だより』〈第43号〉	竹富町史編集室
2020	「西表島03 池田米蔵、卓さん親子一生きる力を受け継ぐ豊かな島の暮らしー」	今村治華		『Coralway』〈若夏号〉	日本トランスオーシャン航空機内誌
2020	『不便が残してくれたものー西表島・船浮からメツセージー』	池田卓著		『不便が残してくれたものー西表島・船浮からのメツセージー』	ボーダーインク

白サギに向かうまなざし

西前津松市

ソンサーメー ソンサーメー バーム コーシ ケークーヨー。祈りを唱えるような訴えるような強い節回しであった。「白サギさま、白サギさま、私にお菓子を買ってください」とある。白サギを目にした波照間の子らはそう口にしたものだった。ユ(世=豊作)ガ(果報)ドゥリ(鳥)とも呼ばれたそれは子どもらにとっても特別だったのである。

ソンサーメーのソンは「白」だろうからソンサーで白サギ、それに「前」(女性の尊称)を添えたのだろうか。いわば白サギ貴婦人様であるが、「白」は水、雨の反映だろう。雨乞い儀礼でミジイ(水)をシスミジイ(白水)とも言い換えるのだ。それにユガフ(世界報)は水の別称でもあったようだから、それを名に負う白サギは言わずもがなだろう。

波照間の島建て神話冒頭にアバーミ(煮えた油の雨)が降る。これは干ばつの苛烈至極なイメージを下地にした神話的表現に思えなくもないが、かつて島人がどれほど日照りを恐れ、降雨を乞い願ったかは想像に難くない。ガシトウシ(餓死年)の言葉があつたくらいだ。天水のみに頼る稻作を強いられていた背景もある。雨乞いの場で発せられる神司の「雨欲しゃぬ」はダイレクトであり激しい。

かつて田植え時などに白サギが雨そぼ降る中飛来すると島人の目には慈雨を引き連れたように映ったのではなかろうか。白い優美なシルエットはシスミジイ(白水)の化身を髪髪させたろうし、神の使いの風情ではなかつたろうか。94歳の島村修氏の子どもの頃は白サギを見ると、「ソンサーメー ユガ(フ)ドリィドゥ」と繰り返し声を張り上げたという。先の唱えに比べると随分シンプルだが、靈威のようなものを感受し祈りに似た心性に向かうのは共通するだろう。

石垣市平得の地城御嶽は「水元(*オモト嶽)の遥拝座」と位置付けられるように水と縁が深い。『八重山大阿母由来記』に沖縄本島弁ヶ岳のイベ三体の内一体が忽然と消えたが、託宣に八重山という島の白鷺が多く集まるところに移られたとあった。そこで尋ね歩いたところ、はたして白サギ群れる地城の地で見つかったとある。白サギと水は関係深いものと認識されていたのだろう。

ところで民謡《マルマボンサン》にシルサヤ(白サギ)は「風の根ゆ知ち」とあるが、風の吹く方向を知っていることと降雨の事情に通じていることはつながるだろうか。

竹富町史編集係の動向 2020年度

2020年

- 4月1日 新型コロナウイルス拡大防止のため、スタッフは午前と午後の交代で在宅勤務(4月中)。
- 4月10日 『沖縄県地域史協議会』〈第43号〉刊行。「竹富町史」収録。
- 4月24日 第11回西表島専門部会(1/31開催)で推薦された、次の3氏に原稿の執筆依頼(竹富町教育委員会社会文化課第80号)。
- 安渓遊地 第1章「島の概況」
- 阪口法明 第3章第13節第6項「イリオモテヤマネコの発見と保護」
- 加治工真市 第13章第2節第1項「言語」(古見を中心とした東部)
- 5月15日 コロナ禍のため「2020年度第1回沖縄県地域史協議会」中止。
- 6月9日 通事孝作氏に、『竹富町史 第11巻 資料編Ⅷ』収録予定の巻頭論文「総説一本書を利用するみなさまへー」を執筆依頼(竹教委社文課第228号)。
- 6月30日 西表島編未提出原稿のうち、専門部会委員担当原稿の締め切り。
- 7月9日 財政課へ第10章「生業」執筆に関わる資料(『竹富町主要施策』)提供依頼。
- 7月24日 第12回西表島編専門部会開催。出席者・石垣金星、大浜修、里井洋一、波照間永吉、花井正光、三木健(以上、専門部会委員)、石垣久雄、通事孝作(竹富町史編集委員長)。
- 8月5日 西表島祖納にて、「総合地球環境学研究所」収集資料調査。出席者は石垣久雄(町史編集委員長)、石垣金星、大浜修(西表島編専門部会委員)、飯田泰彦、米盛恭子(町史編集係)。
→『竹富町史だより』〈第46号〉に「西表島出張復命書」(石垣久雄)収載。
- 8月31日 西表島編未提出原稿のうち、専門部会委員担当者の原稿の締め切り。
- 10月30日 『竹富町史だより』〈第46号〉刊行。町内各戸へ配布。
- 12月3日 西表島編臨時専門部会
- 12月4日 第41回竹富町史編集委員会
- 12月5日 第13回西表島編専門部会、『八重山日報』に記事「西表島編、上下巻に分冊 竹富町史編集委 21・22年度に発刊予定」掲載。
- 12月6日 『八重山毎日新聞』に記事「発刊計画見直し 西表島編上下2巻に」掲載。

2021年

- 1月12日 新型コロナウイルス感染拡大防止に係るテレワーク実施。
スタッフは一日交互にテレワーク開始(2月5日まで)。
- 2月19日 第14回西表島編専門部会開催。出席者は石垣金星、里井洋一、大浜修、花井正光、三木健(以上、専門部会委員)、石垣久雄、通事孝作、島村賢正(竹富町史編集委員)。

第41回 竹富町史編集委員会

2020年12月4日、第41回竹富町史編集委員会が、竹富町教育委員会で開催された。出席者は竹富町史編集委員の石垣久雄、新本光孝、石垣金星、上江洲儀正、大城肇、大浜修、狩俣恵一、花城正美、島村賢正、通事孝作、鳩間真英、三木健、吉川安一(13人)。

竹富町史編集委員長・石垣久雄氏より「コロナ禍のなかでの編集委員会となりました。ソーシャルディスタンスをとりながらの開催となります。島じま編シリーズの完結をめざし、編集委員会の一致協力のもと取り組んでいきたいと思います」と、開会の挨拶があった。

続いて、竹富町教育長・仲田森和氏より、「島じま編シリーズも残り『西表島編』『黒島編』のみとなりました。シリーズの完結への期待が竹富町内外からも高まってきております。編集委員皆さんのお力を借りまして立派になしとげていただきたく存じます」と、挨拶が行われた。

その後、事務局から「経過報告」があり(22頁参照)、次の議題が審議された。



- 議題（1）『竹富町史だより』〈第46号〉の刊行について〈事務局 報告〉
- （2）『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成』の発刊について〈事務局 報告〉
- （3）『竹富町史 第8巻 西表島』(以下、『西表島編』)の進捗状況について〈石垣金星 報告〉
- （4）『竹富町史 第4巻 黒島』(以下、『黒島編』)の進捗状況について〈鳩間真英 報告〉
- （5）『自然編』(ビジュアル版)について〈新本光孝 報告〉
- （6）発刊計画について〈事務局経過報告〉
- （7）その他

議題（1）『竹富町史だより』〈第46号〉の刊行について

『竹富町史だより』〈第46号〉が9月30日、以下の内容で刊行された。

「〈島々村々の踊り・狂言 No.6〉干立のトゥバイラーマ」、「〈長者の大主〉系芸能 —竹富町の民俗芸能にみる—」、「世バナウレ 世バメエレ」(西前津松市)、「西表島出張復命書」(石垣久雄)、「竹富町史刊行物一覧表」、「編集後記」。

事務局から竹富町内各学校・各戸への配布、沖縄県地域誌協議会、沖縄県立図書館、石垣市立図書館など関係機関への寄贈が報告された。

議題（2）『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成』の発刊について

現在、『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VII』を編集中。本書は資料編「新聞集成」シリーズ〈I〉～〈VII〉に続く1巻である。収録記事は1966年(昭和41)の八重山地域の地元紙『八重山タイ

ムス』『八重山毎日新聞』『八重山朝日新聞』から、竹富町に関する記事803件である。

本書は、本文の新聞記事を中心に構成しているが、記事の全体像を把握するため、「総説」（通事孝作）を冒頭に配し、付録として『八重山人名録』（八重山朝日新聞社、1966年）に収載の「八重山群島概観」「竹富町」を再録し、「1966年の小浜島」（大盛聰）を収録した。

既刊の『資料編 新聞集成』は、時代が下るにつれ、関連記事数やその文字数の増加がみられ、それに対応すべく本の体裁を考慮すると、対象期間を短縮せざるをえないようになった。それに伴って、これまでのB5版、上製本（ハードカバー）・函付の体裁から、今後はB5版、ソフトカバー、函なしに変更する計画である。竹富町史編集事業では、新聞記事の資料的な価値の重要性を認識し、今後、本土復帰の1972年までを対象に発刊を予定している。

議題（3）『竹富町史 第8巻 西表島』の進捗状況について〈石垣金星 報告〉

西表島編専門部会長・石垣金星氏の『西表島編』の進捗状況報告のなかで、『西表島編』発行計画の見直しが提案された。見直しの理由として以下の内容があげられ、委員会の承認を受け、年度をまたいで上・下二巻の構成で発刊計画が見直された。

① 提出済み原稿について

- ・原稿の提出状況が悪い（提出率70%）。
- ・予定原稿750頁（当初）に対して、提出済みの原稿530頁（令和2年11月現在）である。
- ・提出済み原稿の多くは当初依頼字数を大幅に超過している。

② 未提出原稿について

- ・全ての原稿が揃うと、予定の頁数を超過することが予想される。
- ・西表島は総面積、自然環境、人口、集落数、戦後の開拓集落や近代産業史など他の島の事情とは異なるため、予定の頁数では収まりきれないボリュームを有する。
- ・提出原稿の多くは当初依頼字数を超えており、未提出分も全て提出されると、当初予定の750頁を超過することが見込まれる。
- ・未提出原稿の担当箇所のリストアップと、内容の再確認を行った結果、歴史、言語、年中行事、信仰に関すること、民俗芸能などの内容を含めると、750頁を大幅に超えることが予想される。
- ・度重なる見直しにより、前回の専門部会後に改めて依頼した執筆者も多い。締め切りまでの提出期限が短いなどの理由で執筆を断られたため、新たな執筆者を検討しなければいけない。
- ・チェック機能である専門部会委員自身の原稿が提出されておらず、他のチェックができていない。
- ・人物の章など、どのようにまとめるか決まっていない章がある。
- ・新型コロナの影響で、思うように編集委員会の開催ができず、編集作業がはかどっていない。

③ 予算面での見直し

- ・来年度の予算計上にあたり、その根拠となる頁数、発行部数、見積（版下製作費、印刷製本費）を当局から求められているが、『波照間島編』に準じて予算を立てた場合、予算範囲内での発行部数では、早期の品切れが予想される。

※『波照間島編』は、予算内で頁数、部数を調整し、900頁で600部印刷したが、発刊から2年（2018年3月発刊）で、すでに品切れの状態である。

④ その他

- ・今後、世界遺産登録も見込まれ、ますます注目度が高まる。
- ・竹富町史「島じま編シリーズ」は、町内外、研究者からも注目されており、書店からの問い合わせも多い。新聞報道もされており、事業全体に対しての期待も大きい。
- ・これまで西表島の自然・歴史・文化を総覧する本ではなく、西表島の総合的な資料として発刊すべきである。

議題（4）『竹富町史 第4巻 黒島』の進捗状況について〈鳩間真英 報告〉

黒島編専門部会長・鳩間真英氏より、専門部会発足当初からの経過を振り返りつつ、『黒島編』の進捗状況の報告があった。

2004年3月1日に第1回黒島編専門部会（於・町史編集合同会議室）が開催された。『竹富町史第4巻 黒島』（以下、『黒島編』）の発刊に向けて編集委員3人（本成善康、玻座真武、當山善堂）に加え、新たに宮良當成氏を専門委員に委嘱し、黒島編専門部会を発足させる。2006年2月には、新城純、銘里君夫、鳩間真英、宮良當皓、本成尚、宮良和美の6氏に協力依頼を文書にて行ない編集体制を固めた。2006年3月2日に第2回黒島編専門部会（於・町史編集合同会議室）開催。

2008年9月には、黒島編専門部会委員欠員の補充として、新城純、鳩間真英、本成尚の3氏に専門委員の委嘱を行ない、第4回黒島編専門部会（竹富町史編集室を開催）。担当の執筆者を確認し、28人に原稿執筆を依頼した（竹富町教育委員会総務課第575号）。

その後、第5回黒島編専門部会（2009年7月31日）、第6回黒島編専門部会（2010年7月30日）、第7回黒島編専門部会（2010年12月21日）と専門部会を重ね、参考資料を整理した。

2015年には、玻座真武氏の呼び掛けで、「戦争体験座談会」を開催し（10人が出席）、『竹富町史だより』（第38号）で「戦争と黒島」として報告することができた。

2016年11月11日に黒島編専門部会長・玻座真武氏が逝去された。12月2日に玻座真家より玻座真武氏の遺稿「黒島ノート」（仮題）を受理し、この扱いについて専門部会委員によって話し合われ、2017年6月から毎月「黒島ノート」の読み合わせを始める。その成果として『竹富町史だより』（第40・41号合併号）にまとめることができ、玻座真武氏のご靈前に『竹富町史だより』（第40・41号合併号）（玻座真氏の遺稿収録）を捧げた。

その後も原稿の読み合わせが恒例となり、毎月10日前後に執筆者の有志が集まった。2019年10月には、「人物調査票」を作成し、関係者に配布したが集計できていない状況である。

2020年3月17日に開催予定していた第8回黒島編専門部会がコロナ禍のため延期された。

議題（5）『自然編』〈ビジュアル版〉について〈新本光孝 報告〉

『自然編』〈ビジュアル版〉小委員会委員長・新本光孝氏より具体的な章立て（章・節レベル）、関連資料が提示され、進捗状況が報告された。章立ては次の通り。

第1章「竹富町の島々」、第2章「竹富町のシンボル」、第3章「天文と台風」、第4章「石西礁湖」、第5章「西表島の景観・自然」、第6章「西表島の生き物」、第7章「島々の景観・自然・生き物」、第8章「天然記念物」、第9章「特定植物群落」、第10章「巨大マンタと生きた化石」。

執筆担当者、写真提供の依頼も確認済みであり、公式な執筆依頼などを進めることが求められた。

議題（6）発刊計画について〈事務局 経過報告〉

西表島編専門部会の発刊見直し案が承認されたことにより、『黒島編』の発刊が、令和5年度へ変更することになった。見直し後の発刊計画は次の通り。

発刊年度	巻名	細目	内容
2020年度	竹富町史 第11巻 資料編	新聞集成Ⅷ	1966年
2021年度	竹富町史 第8巻 島じま編	西表島 上巻	
2022年度	竹富町史 第8巻 島じま編	西表島 下巻	
2023年度	竹富町史 第11巻 資料編	黒島	
2024年度以降	竹富町史 第11巻 資料編	新聞集成 XI～14	1967年～1972年

上記以外の発刊予定資料は次のとおり。これらについては、原稿などの準備が整い次第、順次発刊していく予定である。

- ・竹富町史第1巻『通史編（全）』
- ・『自然編』（ビジュアル編）
- ・『自然編』（資料編）
- ・『資料編 前近代編、近代編』
- ・『資料編 社会編、産業編』
- ・『資料編 郷友会編』
- ・『資料編 言語編』
- ・『通史編 総索引』

議題（7）その他

『郷友会編』について、『郷友会編』小委員会委員長・狩俣恵一氏が、これまで各島1人ずつ委員を選出して取り組むことになっていたが、実質的な活動ができておらず、専門部会の強化し編集体制を整えることを求めた。また、資料収集と同時に、各郷友会を牽引されてきた方への取材の必要性を訴えた。

また、『竹富町史 第7巻 波照間島』が完売し、現在品切れの状況である。竹富町内外から増刷を求める声があがり、それに答えるべく増刷が承認された。

2020年度 受贈図書

書誌書名(発行所、発行年)	編著者	寄贈者
『アカハチー沖縄・八重山の英雄オヤケ赤蜂を探してー』(ハガツサブックス2020年)	高崎 彰	通事孝作
『奄美民俗』(第2号)(鹿児島県立大島高等学校、1961年)	鹿児島県立大島高等学校郷土研究クラブ	米盛恭子
『[復刻] 西表島農業調査報告書』(第一編西表島の概況) (1960年)	総理府特別地域連絡局	川平成雄
『西表島 浦内川架橋 白浜港築港 竣工記念誌』(竹富町、1970年)	西表島 浦内川架橋 白浜港築港 竣工記念誌編纂委員会編	石垣佳彦
『西表島のマラリア撲滅史』(那根武、1979年)	那根武	三木健
『西表島研究 2018』(東海大学沖縄地域研究センター所報、2019年)	東海大学沖縄地域研究センター編	東海大学沖縄地域研究センター
『西表島租納星立の節祭の芸能』(西表民俗芸能保存会 1979年) 2冊	西表民俗芸能保存会	米盛恭子
『沖縄「戦争マラリア」—強制疎開死3600人の真相に迫るー』(あけび書房、2020年)	大矢英代	玉城功一
『沖縄・西表炭鉱 坑夫聞き書き 1972』(樹林舎、2020年)	松村修	松村修
『沖縄の戦後を歩く～そして地球の未来を考える～』(一般社団法人沖縄しまたて協会、2020年)	NPO 法人沖縄ある記	一般社団法人沖縄しまたて協会
『沖縄研究ノート9』(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、2000年)	〈共同研究〉南島における民族と宗教編	米盛恭子
『沖縄研究ノート16』(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、2007年)	〈共同研究〉南島における民族と宗教編	米盛恭子
『沖縄県ハンセン病証言集 資料編』(沖縄愛楽園自治会・宮古南静園入園者自治会、2006年)	沖縄県ハンセン病証言集編集総務局編	沖縄県ハンセン病証言集編集総務局
『沖縄県公文書館研究紀要第22号』沖縄県公文書指定管理者((公財) 沖縄県文化振興会公文書管理課、2020年)	(公財) 沖縄県文化振興会公文書管理課編	(公財) 沖縄県文化振興会公文書管理課
『沖縄県史 各論編 第九巻 民俗』(沖縄県教育委員会、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	沖縄県教育委員会
『沖縄県史だより』(第29号) (沖縄県教育庁文化財課史料編集班、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育委員会
『沖縄県竹富島仲筋集落の余興芸能「バッサイロン」に関する一考察—沖縄・小笠原に伝わったミクロネシアの行進踊りの系譜とその音楽表現を中心にして—』(『南島文化』(第42号) 沖縄国際大学南島文化研究所、2020年) [抜刷]	小西潤子	小西潤子
『沖縄県平和祈念資料館だより』(No.38) (沖縄県平和祈念資料館、2020年)	沖縄県平和祈念資料館編	沖縄県平和祈念資料館
『沖縄県立博物館・美術館 博物館教育普及報告書令和元年度』(沖縄県立博物館・美術館、2020年)	沖縄県立博物館・美術館編	沖縄県立博物館・美術館
『沖縄県立博物館・美術館 教育普及活動令和元年度』(沖縄県立博物館・美術館、2020年)	沖縄県立博物館・美術館編	沖縄県立博物館・美術館
『沖縄県立博物館・美術館開館10周年記念誌 10年の歩み』(沖縄県立博物館・美術館、2020年)	沖縄県立博物館・美術館編	沖縄県立博物館・美術館
『沖縄国際大学南島文化研究所紀要 南島文化』(第43号) (沖縄国際大学南島文化研究所、2020年)	沖縄国際大学南島文化研究所	沖縄国際大学南島文化研究所
『沖縄史料編集紀要』(第43号) (沖縄県教育委員会、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	沖縄県教育委員会

『沖縄戦ひめゆり学徒隊の歴史を海外に伝える展示プロジェクト』2019年度報告書（ひめゆり平和研究所、2020年）	ひめゆり平和研究所	ひめゆり平和祈念資料館
『沖縄文化研究』(47) (法政大学沖縄文化研究所、2020年)	法政大学沖縄文化研究所編	法政大学沖縄文化研究所
『角川 日本史辞典』〔第二版〕(1994年、角川書店)	高柳光寿・竹内理三編	飯田泰彦
『櫻若葉—創立95周年記念誌』(西表青年会、2017年) 2冊	西表青年会	西表青年会：星 光
『喜舎場永珣資料調査報告書』(石垣市立八重山博物館)、2018年	石垣市立八重山博物館	石垣市立八重山博物館
『喜扇会 本仲征子・岡山睦子舞踊研究所 喜扇ぬ綾舞 第五回公演』(2020年)	本仲征子・岡山睦子舞踊研究所	本仲征子・岡山睦子舞踊研究所
『旧制東海大学設立認可申請書類』〈下〉[東海大学資料叢書6] (学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター、2017年)	学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター編	学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター
『口承文芸の俗信性—西表島の「山中で呼ばれた話」から—』(『沖縄民俗研究』(第36号) 2020年) [抜刷]	星野岳義	星野岳義
『市内遺跡等発掘調査報告書Ⅱ』 豊見城市文化財調査報告書(第16条) (豊見城市教育委員会、2020年)	豊見城市教育委員会文化課	豊見城市教育委員会
『糸満市の歴史と民俗を歩く旧真壁村集落ガイドマップ』(糸満市教育委員会、2019年)	糸満市教育委員会総務部生涯學習課	糸満市教育委員会
『写真資料集 勝公彦 一その紙漉き人生一』(勝公彦記念琉球紙振興基金実行委員会、2020年)	上江洲敏夫	上江洲敏夫、勝公彦記念琉球紙振興基金実行委員会
『首里城公園に関する調査研究普及啓発事業年報』(第10号) (平成30年度号) (一般財団法人沖縄美ら島財団、2020年)	花城良廣編	一般財団法人沖縄美ら島財団
『庶民がつづる沖縄戦後生活史』(沖縄タイムス社、1998年)	沖縄タイムス社	米盛恭子
『昭和五年 八重山郡勢要覧』(八重山支庁、1930年)	八重山支庁	三木健
『証言 沖縄スパイ戦史』(集英社、2020年)	三上智恵	玉城功一
『新制東海大学設立認可申請書類』〈上〉[東海大学資料叢書7] (学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター、2019年)	学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター編	学校法人東海大学望星学塾学団史資料センター
『戦災復興のための西表開発記念誌』(西表開発友の会、1985年)	宮良長安	三木健
『台湾調査報告』(地域研究シリーズNo.46) (沖縄国際大学南島文化研究所、2020年)	沖縄国際大学南島文化研究所編	沖縄国際大学南島文化研究所
『竹富島古謡誌—古代文化の源流を訪ねてー』(竹富島古謡研究会、1984年)	本庄正佳	米盛恭子
『竹富島波座間村の狂言』(株)城野印刷所沖縄、2000年)	新井潔編	米盛恭子
『中国での戦争体験記を読む～沖縄出身兵100人の証言～』(ゆうな印刷工房、2020年)	沖本裕司	南京・沖縄をむすぶ会
『中琉歴史關係檔案』(同治(一)) (同治(二)) (國家圖書館出版社)	中國第一歷史檔案館編	沖縄県教育委員会
『土と生きる～沖縄の稻作～』(沖縄市立郷土博物館、2006年)	沖縄市立郷土博物館	米盛恭子
『豊見城古島B遺跡発掘調査報告書』 豊見城市文化財調査報告書(第15集) (豊見城市教育委員会、2020年)	豊見城市教育委員会 文化課	豊見城市教育委員会

『仲筋村の芸能 なーじぶどうい』(全国竹富島文化協会、2001年)	小林基裕編	米盛恭子
『南城市的沖縄戦－資料編－』(南城市教育委員会、2020年)	「南城市的沖縄戦資料編」専門委員会	南城市教育委員会
『南島文化』(第42号) (沖縄国際大学南島文化研究所、2020年)	沖縄国際大学南島文化研究所編	沖縄国際大学南島文化研究所
『南島文化研究所所報』(第65号) (沖縄国際大学南島文化研究所、2020年)	沖縄国際大学南島文化研究所編	沖縄国際大学南島文化研究所
『年報』(第30号) 公益財団法人沖縄女師一高女ひめゆり平和祈念(財団ひめゆり平和祈念資料館、2019年)	公益財団法人沖縄県女師一高女ひめゆり平和祈念財団編	公益財団法人沖縄県女師一高女ひめゆり平和祈念財団
『波照間 戊年生年合同式典・祝賀会』(アルバム) (石垣カメラ制作、2006年)	石垣佳彦編	石垣佳彦
『墾道 一兼城自治公民館入植50周年記念誌－』(兼城自治公民館入植50周年記念事業期成会、2006年)	南山舎編	新城良乃
『ふんぬむとう』(瑞木書房、2001年)	石垣仲筋会創立三十五周年記念誌 編集委員会編	米盛恭子
『法政大学沖縄文化研究所所報』(第86号) (法政大学沖縄文化研究所、2020年)	法政大学沖縄文化研究所編	法政大学沖縄文化研究所
『宮良村古謡誌』(宮良村古謡保存会、1979年)	宮良村古謡保存会	米盛恭子
『八重山歌謡に見える動物』(『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』(第6号抜刷)、2000年)	山里純一	米盛恭子
『八重山歌謡に見える動物』(琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集) (第6号抜刷)、(2008年)	山里純一	米盛恭子
『八重山戦争マラリア問題解決の記録～国の慰籍事業実現～』(新星出版株、2019年)	篠原武夫八重山戦争マラリア遺族会編	篠原武夫八重山戦争マラリヤ遺族会
『八重山島風土病調査書』(1892年)	我如古楽一郎	三木健
『名桜大学「琉球文学大系」編集刊行事務局報風』(第2号) (名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局編、2020年)	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局編	名桜大学「琉球文学大系」編集刊行事務局
『明治二十七年 八重山統計表』(1894年)	八重山島役所	三木健
『読谷村のしまくとうば2 おばあが語るどう一よーじょー』(読谷村役場、2002年)	読谷村教育委員会文化振興課 読谷村史編集室編	読谷村教育委員会
『琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』(第12回) (沖縄県教育委員会、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	沖縄県教育委員会
『琉球の方言』(44号) (法政大学沖縄文化研究所、2020年)	法政大学沖縄文化研究所編	法政大学沖縄文化研究所
『琉球の方言12』(八重山・与那国島) (法政大学沖縄文化研究所、1987年)	法政大学沖縄文化研究所	米盛恭子
『歴史地理教育』(No.913) (歴史教育者協議会、2020年)	歴史教育者協議会編	宮良純一郎
『歴代宝案 訳注本 第10冊』(沖縄県教育委員会、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『歴代宝案』訳注本第10冊語注一覧表 (沖縄県教育委員会、2020年)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班編	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『わたしたちの宮古島市 ー4年生社会科副読本ー』(第2版) (宮古島市教育委員会、2020年)	宮古島市教育委員会編	沖縄時事出版

竹富町史刊行物一覧表

令和3年3月現在

No.	書籍名	発行年	価額(本体)
1	竹富町史 別巻② 竹富町史文献目録	1990年	無料配布
2	竹富町史 別巻③ 写真集「ぱいぬしまじま」	1993年	¥2,500
3	竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」	2005年	¥2,500
4	竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」	2002年	¥2,500
5	竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」	2006年	¥2,500
6	竹富町史 第十巻 資料編「近代4－官報にみる八重山」	2007年	¥2,500
7	竹富町史 第十巻 資料編「近代5－波照間島近代資料集」	2009年	¥2,500
8	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」	1994年	¥2,000
9	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」	1995年	¥2,000
10	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」	1997年	¥2,000
11	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅳ」	2001年	¥2,000
12	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅴ」	2003年	¥1,600
13	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅵ」	2004年	¥2,000
14	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅶ」	2019年	¥2,000
15	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅷ」	2021年	¥2,000
16	竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」	1996年	¥3,000
17	竹富町制施行50周年記念誌「ぱいぬしまじま50」	1998年	¥2,500
18	竹富町史 資料集①「鉢田義司日記」	2000年	¥1,500
19	竹富町史 第二巻「竹富島」	2011年	¥3,000
20	竹富町史 第三巻「小浜島」	2011年	¥3,000
21	竹富町史 第五巻「新城島」	2013年	¥3,000
22	竹富町史 第六巻「鳩間島」	2015年	¥3,000
23	竹富町史 第七巻「波照間島」	2018年	¥3,000

編集後記

いつの間にか2021年になっていた。

年末の忘年会や、新年会もことごとく中止となり、年末年始の家族の帰省さえ制限された。「これまでに経験したことのない・・・」という言葉が、決して大げさな表現ではなく、これまでのあたり前があたり前ではない世の中に変わっていった。連日のテレビの第一声は新型コロナに始まり、緊急事態宣言、クラスター、テレワーク、リモート会議、時短営業、三密回避、聞きなれなかった言葉が今では日常会話の中で使われる。

竹富町史でも、年末の町史編集委員会を通常開催できるのか、新型コロナウイルス感染症の感染状況を横目に見ながら判断することとなった。12月9日、感染予防に注意しながら、なんとか開催することができた。

しかし、編集委員の多くは沖縄本島からの参加。70代、80代の委員の方々もあり、開催後の体調についても気が気ではなかった。コロナ禍以降、主流となっているオンライン会議ではあるが、未だアナログな町史編集委員会においては、会議テーブルを囲んで（お互いの距離は確保しつつ）会議が開催できたことに安堵した。

会議では、今年度の最優先課題である『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成VIII』の発刊計画の確認、「島じま編シリーズ」『西表島編』を上・下2巻に編集すること、『黒島編』の発刊年度を後ろにスライドさせること、完売品切れとなっている『波照間島編』を増刷することなどが承認された。

さて、今回発行の『町史だよりNo.47』では、「竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ」として、竹富町における感染症の水際対策を中心に、「病魔の神々」「歴史にみる感染症の流行」「年中行事にみる悪疫退散の願い」として、竹富町の先人が感染症とどう向き合い、何を講じてきたのかを振り返っている。歴史や行事から学ぶことが、この世界的な危機的状況に対応できる力になればと願うばかりである。

今年こそは、豊年祭、結願祭、節祭、種子取祭など伝統行事はできるだろうか。毎年4月に行われてきた船浮音まつりは、昨年に続き2年連続で中止が決定した。鳩間島音楽祭、小浜節大会、デンサ節大会、やまねこマラソンはどうだろう。祭りや行事で得られる活気やエネルギーは、何ものにも代えがたい人間の生きる原動力だということを心から感じる。

自粛生活で飲み会は減ったが、運動不足と体重増加が新たな悩みとなった。外出の機会がぐんと減り、自然の中で季節を感じる時間がめっきり減った。

それでも季節は移り変わる。桜の季節が終わり、デイゴの花が咲き、暑い夏がやって来る。

先日、八重山でのワクチン接種が始まったと報道され、コロナ自粛に明るい光が見え始めた。季節が移り変わるように新型コロナウイルス感染症の脅威が、いつの間にか終わっていて、コロナ以前の世の中以上にだれもが過ごしやすい世界がひらけていることを信じて、今日もマスクの着用とうがい手洗いに精を出す。

2021年3月31日発行

竹富町史だより 第47号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18-3F

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp

